

調査と地域貢献

八戸大学教授・学長補佐

小 渡 康 朗

2000年7月1日、それまでの民間企業での仕事を離れ、新しい職場すなわち現在の勤務場所である八戸大学に赴任した。5月の末日にて、それまで勤めていた会社の役員を退任し、6月中は国内外の小旅行や今後の小生の新たなスタートを祝ってくれる人達とのいろいろな集いで楽しい時間を持たせてもらった。

八戸は小生の故郷である。高校まで過ごした懐かしい地でもあった。父母の出身地であり、今では姉や弟、親戚の人々、それに何よりも学生時代の学友、先輩、後輩、同期の皆々が元気で活躍している町でもある。この地に第二の職場をもてたのは、ある意味では幸運だったのかもしれない。家族を東京においての二重生活ではあるが、これもまた考え方によっては楽しいことでもあろう。確かに、子供達は東京にて勤務となると小生が東京から八戸まで通勤というのが普通のパターンであるが、幸いにも八戸には、一人住まいできる住居もあり、八戸に住んでも東京に住んでもいい状況であれば、気の向くままに過ごそうか、ということになったのである。

総合研究所

赴任日に交付された辞令は“八戸大学教授、総合研究所長”であった。大学への話のあった最初から、総合研究所長ということは知らされていたが、具体的にはどのような研究がされているのか、どのような実績があるのか、その目的とするところは何か等々は全く知らずに来てしまったというのが本音であった。

八戸大学は1981年に創設された、大学としての歴史も20年余にしかならない非常に若い大学である。設立以来、商学部のみ単科大学であり、系列校に八戸短期大学を持つが、歴史は短期大学の方が10年ほど古い。大学は創設時、併設機関として「経済文化研究所」をスタートさせたが、その後「産業文化研究所」と名を変え、更には1993年にこの研究所に法人全体の「情報処理センター」を統合し「八戸大学総合研究所」が設立されたのである。

総合研究所の任務を一言でいえば“広く地域社会と連携しながら、地域の産業・文化・学術振興の発展のために貢献する”ことである。ひらたく言えば地域と一体になり、研究・調査活動を行い、地域に入り込んでの実践活動をも促進していくことであろうか。勿論大学・法人内に対する教育・啓蒙・支援は言うまでもないが、特に、昨今ではIT技術を基にした情報教育、或いはネットワークシステムの管理・運営、開発・改良は欠かせなく、学内外でのそれぞれでの教育にも忙しい。

話は若干横道にそれたが、赴任当時のことに話を戻すと、総合研究所とは名ばかりで、この20余年間、ほんの数本の受託調査記録があるだけで、実績としてはなにも残っておらず、ゼロからのスタートを実感したのである。

まず、その手始めとして、研究所活動を地域との連携でより活発化させるため、2002年4月市の中心部に「総合研究所市内オフィス」を開設した。

地域における調査意識

これまで調査の世界だけで育ってきた、一人のリサーチ・マンとすれば、地域、活動の世界が変わったとはいえ、自己の周辺の調査に対する認識・状況・環境等は気になるものである。ましてや、出来ればこれからも調査、あるいは調査に関連する仕事を続けていきたいと思っているものにとっては、気になることである。小生の場合も同じであった。

7月に着任草々、いろいろな会合に顔を出す機会に恵まれた。地元でもある気安さもあって出来るだけ出席するように努めたのはいうまでもない。10人内外の小グループから、100人を超す研究会等、その目的も構成員もバラバラではあったが、そのなかでも調査に関連する情報はかなり多くあった。そういう意味では地方都市とはいえ、調査情報の浸透は相当進んでいるのではないかと内心安堵しかけたのも事実である。実際に、地方紙の紙面上には毎日地元の様々な調査結果が掲載されているし、マスコミは勿論、人々の日常の会話の中にも調査数値は頻繁に引用されているのである。しかし、余り時間を経ることなく、そのような状況のもとにあるからといって、調査そのものの正しい理解・認識がなされているということとは全く別であるということを感じ知らされるのである。

あるとき、地元の中堅の人たちで組織している研究会の例会があり、ゲストとして出席した。メンバーの何人かはこれからのこの地域を背負ってたつ連中である。その場である幹部からその研究会で実施した地元の住民意識調査の結果が発表された。これからこの地域をどのようにしていくべきか、住民は何を考え、どのようにあるべきかと思っているのか。地域の住民調査とすればもっとものテーマであり、貴重な基礎データとなるはずのも

のである。回収サンプルはほぼ1000サンプル。年齢分布も10代から70代までカバーしている。これは大変なもんだ。このサンプルサイズの調査であれば、いろいろな分析に耐えられる。これからが楽しみだと思って発表を聞いていた。しかし、説明を聞いているうちに次第に不安が増幅してくる。発表者の説明によると、サンプリングはランダムに取っているの調査上は問題はない。年齢の20代から40代は市の中心街にある某金融機関の本店窓口に来た人たちに聴取した。10代と50代以上は街頭で聞いた。とのことである。この説明を聞いて背筋が寒くなった。地域のリーダーがこのような認識レベルではどうしようもない。「サンプリング」も「ランダム」も何もわかっていない。そのようなリーダーのもとで“調査”と称するものが実施されていたのである。

その後、時間が経つにつれて次第にわかって来た事は、この地域のリーダーも最初からそんなにデタラメであったのではない。調査というものを推進する責任者にまつりあげられ、自分なりの中途半端な知識でもって皆に説明しているうちに、誰も反論も修正もないことから自分の言っている事、している事は間違いないとの錯覚に陥ってしまったのであろう。このリーダーがもっと自分で学習すべきだという声はあろう。しかし、調査という分野の専門家も、調査というものを教えてくれる人もいないなかで、このような悲劇が生まれてきたのは決してここ八戸に限った事ではないのである。

調査の実践

調査を経験してきたものとしては、やはり八戸に来てからの調査経験について述べておく必要がある。以下にいくつかの体験状況

を述べてみたが、とても調査だけで総合研究所を続けていく訳にはいかない。また、地方においては調査発注者はごく限られてくる。県市等の地方自治体或いは商工会議所等の団体がほとんどであり、民間の企業は皆無とっていい。

以下、関わったいくつかの地元での調査業務状況について記述してみよう。

・選挙予測調査

八戸大学総合研究所に落ち着いてまもなく、小生にとっては嬉しい連絡が入った。八戸市長選挙の予測調査を手伝ってほしいとの連絡であった。相手は地元の報道機関の報道部長である。この報道機関も従来から選挙予測調査は実施してきてはいるが、これを機会に一層力を入れていこうという意気込みであろう。しかし、従来からの流れがあり一気に予算は増やせない。結局は小生がボランティアで協力することになった。

今度の市長選は保守系2人の一騎うちであり、激戦が予想された。一人は衆議院議員大嶋理森派候補、もう一人は参議院議員田名部匡省派候補と地元では大嶋田名部の代理戦争と言われていた。地方の選挙は大都市選挙と違って地縁・血縁・姻戚関係、或いは町内会・取引関係等、皆がなじがらめのなかでの選挙である。このような中で選挙調査の設計に入った。調査は電話調査で実施するが、上記のような事情から今回特有の調査項目が挙げられ、それでも実施可能な質問文におとすのが一苦労であった。サンプルサイズは先方は500を主張したが、小生はこれからの為にもとお願いし、設定で1500にしてもらった。尚、サンプリングは選挙人名簿からであるが、サンプリングしたものの電話番号を調べ、電話番号の判らないものには郵便で問い合わせるとい、以

前どこかでやっていた方法である。調査に携わったメンバーは皆熱心であり、調査後の検討会も楽しかった。

詳しい過程は省略するが、調査としては小生も慣れている調査でもあって、この地に落ち着いての最初の仕事としてどうやら満足のいくものであったように思っている。

・新幹線開通影響調査

2002年12月、東北新幹線が八戸まで開通した。それまでは東京 盛岡間であり、八戸までは盛岡で乗り換えてから更に1時間強を要した。しかし、新幹線が八戸まで開通することにより東京 八戸間最速2時間56分となったのである。果たしてこの新幹線開通は地域に繁栄をもたらすか、或いはストロー化現象が起きるのか、との問題は地元にとっては大関心事である。当然、八戸商工会議所としては調査することになった。対象は商工会議所会員で、調査方法は郵送調査法で実施。会員各々は新幹線開通に向けてどのような対応を取っているのか、将来に対してどのような展望で臨んでいるのか、或いは中央からの進出に対してどのような対策を考えているのか等々を捉えるのである。サンプルサイズは発送数でほぼ5000社。更に、調査結果を補強する意味で主な6業種についてそれぞれ3企業・団体にヒアリング調査を実施した。調査結果について一言だけコメントしておく、地元の意識としては、業種によって若干の違いはあるがほとんどの企業が危機感意識に乏しく、また特別の対応も取っていないということが判った。新幹線が来るとい、まさに千載一遇のチャンスに何をしているのだろうかと言うのが小生の偽らざる感想であった。

商工会議所の調査とほぼ時期を同じくして、地元の新聞社が市民と企業を対象に新

幹線開通に関する電話調査を実施する企画が浮上した。電話調査ということから質問量は限られる。しかも聞きたい事は山ほどある。担当記者との数回にわたる打ち合わせの結果どうやら期日のデッドラインまでこぎつけた。市民のサンプルは電話帳、企業のサンプルは帝国データバンクのデータベースを利用した。結果はすぐ数回にわたる紙面上で発表されたのは言うまでもない。

・来街者調査

昨年未、八戸中心街における来街者調査が2件たてつけに総合研究所宛てに発注された。一つは青森県の外郭機関から、もう一つは中心街の活性化委員会である。年明けは大学も急に忙しさの増す時期ではあるが、1月の一本は学生を調査員に使った。2月に実施した分は大学の試験期でもあり、市内の女性グループに調査員をお願いした。この女性グループは思いのほか実力のある集団であり、見事な団結力を持っていた。冬の八戸の寒さは雪国の寒さとは違って、まさに“しばれる”のである。足元は凍っているし、時折吹きつける北風の寒さは尋常ではない。それでも熱心に調査実施に協力してくれた女性グループには今後も是非協力を仰ぎたいと思い、その後、彼女達のグループに「調査入門講座」を3日間にわたって実施したのである。

地域への貢献事業

調査以外のことでどのようなことを手がけてきたのかについても述べておきたい。むしろ地方の大学の使命としては、地域に対する社会貢献という事は決して避けては通れない今後の命題であり、これから益々そのウエイトが増大していく分野でもある。少々大げさに表現すると、大学そのものの存続をかけて

も取り組むべきテーマでもある。これまでに取り組んできたものは、主に、中央官庁や地方自治体からのプロジェクトであるが、中には調査による部分も多く含まれており、それなりに調査の楽しみも味わいながら仕事をすすめている。主な幾つかのプロジェクトについてそのアウトラインを以下に記す。

・「多様な主体の参加と連携による活力ある地域づくりモデル事業」

国土交通省からの委託事業であり、全国の十数カ所がモデル地区として指定され、その中の一つとして八戸があり、プロジェクトの受託先として八戸大学総合研究所が選ばれたのである。このプロジェクトは、地域の特に中心市街地の活性化モデルを探るためのモデル事業であり、全国の他地域でも採用可能なモデルを追及しようとするものであった。ここでいう「多様な主体」とは、市民活動団体・個人(ボランティア、NPOなど)、学生、主婦、高齢者、外国人などで、いわゆる一般市民の総称とうけとめていただければいい。都市の中心街としての機能が相対的に低下してきているこの時期、市民参加で沈みかけた

中心街を活性化させていこうという試み。実際に実験として取り組んだのは、一つは「まちの賑わい創出実験」と「まちなか交流センター」の運営であった。前者は主として学生達が中心街に出て行って七夕、三社大祭、ハロウィン等の企画からの参加で様々な活動を行うものであり、後者は中心街の空き店舗を借り上げ、市民への情報提供や学生、NPO、市民団体等の活動拠点として提供した。

・「生涯学習まちづくり支援モデル事業」

文部科学省からの委託事業であり、やはり全国からモデル地域を選んでのプロジェ

クトである。目的とする所は“生涯学習機関として、地域への貢献が求められている大学・短大等の高等教育機関の人的・知的・物的資源を最大限に活用し、住民による個性と魅力あるまちづくりを進める”ためのモデル事業である。本来は単年度の事業であるが、このプロジェクトは2年続けての受託となり、現在も継続進行中である。本年度は住民主体による新たな地域づくりを考えるための事業に取り組むこととした。市内に二ヵ所のモデル地区を設定し、一つは実践的な学習を通じて住民自治の新しい形である「近隣政府」実現の可能性を探り、もう一つはコミュニティビジネスによる地域の再生をテーマにすすめる。

・「都市・産業再生フロンティア八戸」

このプロジェクトは国の“都市・産業再生”構想に基づいて八戸市が作成した事業であり、従って八戸市からの受託事業である。その目的とするところは、この地域の産業・技術基盤、学術・研究シーズなどの特性を発掘し、今後の都市の産業の方向性を確認し、次代を支える実現可能性に富ん

だ都市・産業再生プロジェクトを提起することにある。結果として「資源循環型地域社会」「21世紀型ベンチャー育成」「中心市街地活性化」「観光ツーリズム」も4プロジェクトの提案ということで報告書をまとめた。このプロジェクトでは製造業主体のヒアリング調査がかなり貢献した事はいうまでもない。

以下、主な項目だけを上げておく。

- ・「起業家育英事業」
- ・「企業中堅幹部育成事業」
- ・「海のNPO研究会」
- ・「ITコミュニティ推進事業」

等々が主なものであろうか。

編集子の意に反して、本来の研究内容ではなく、小生のささやかな経験に頁を費やした。

地域に生きる大学はその地域のために如何に貢献出来るかが重要なポイントとなる。その為にはこれまで述べてきたような諸プロジェクトに如何に効率的に調査を生かしていくかが現時点の小生にかせられた課題であるような気がしている。